

# 海を越えた 農民オケ

下 きずな

北海道と変わらない寒さが、肌を刺すデンマーク北部の農業地帯ユトランド半島。丘陵に広がる農地の中にマツやシラカバ、モミの防風林が目につく。

「北海道の景色みたいだ

## 北海道酪農の祖国で交流

候も北海道と似たデンマークは、道が大正時代に同国の酪農家を招くなど、長年、北海道酪農にふさわしい。金田・同大特任教授(66)の仲立ち

で、公演の話は一気に具体化。短い公演日程の合間に、現地酪農家との交流も実現した。

2回目の演奏会(2月14日)

が行われた半島のロンデ市のカロー有機農業学校。同系列のとの森三愛高校(江別市)の生徒の農業研修も毎年受け入れている。

### 賢治の故郷で...

会場には学生だけでなく、近隣の農家も詰めかけ、演奏後には意見を交換。「農業学校で学んで農業経営者になる資格を得て、親から農場を買い取った」。地元の酪農家、

ピエテ・コックさん(46)らの説明を聞いた団員は、日本とは違う農業教育や農業経営の制度に驚きの声を上げた。

農家でのホームステイを体験した団員も、農場を見学した石狩管内当別町の農家、高橋幸治さん(73)は「先進的」というこの国のイメージに反して農場は古いものを大切にしている。住宅はゆとりがあり、心豊かに暮らしていると肌で感じた」と目を輝かせた。

「海外初公演がデンマークで本当によかった」。農業を通じた交流や演奏を終え、牧野代表は会心の笑みを浮かべた。

「農民こそ真の芸術家」。

農業と芸術の両立を説いた宮沢賢治に共鳴した牧野代表が農民オケを旗揚げして17年。「いつか農民オケで賢治の故郷、岩手県花巻に演奏に行ってみよう」。海外公演を終えた牧野代表は、次の夢へと歩み始めた。

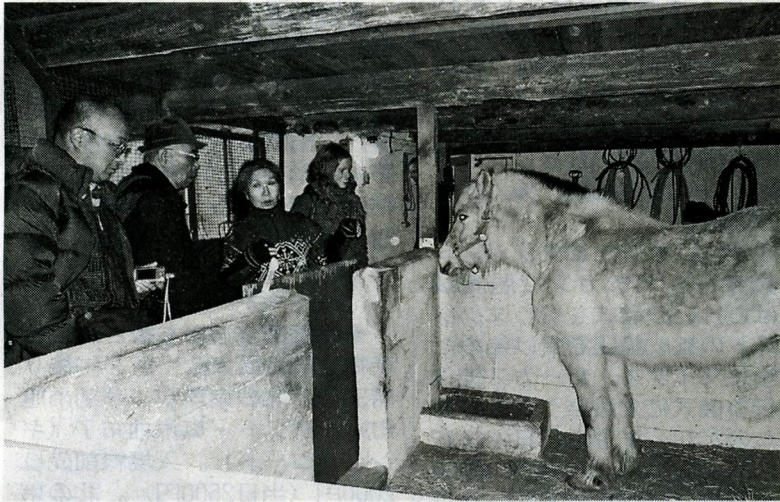
ね」。2月中旬に半島のシルケボー市などを訪れた北海道農民管弦楽団(農民オケ)でバイオリンを弾く、十勝管内池田町の畑作農家、石川真滋さん(51)が声を上げた。人口500万人足らずで気

道農業の手本。農民オケ初の海外公演を実現に導いたのも、農業を通じたつながりだった。

### 公演実現 一気に

「どの国に行くか、そして、なぜそこに行くのかが大切じゃないか」。2年前、牧野時夫代表(48)から欧州公演について相談された金田勇さん(50)は切り出した。北大交響楽団時代の牧野代表の先輩で、2007年に江別市の酪農学園大教授に就任、農民オケにも加わっていた。

そこで目を付けたのが、デンマークと酪農学園大との関係だ。同大は、デンマークの酪農の道内導入を目指して創



ホームステイ先の農場を見せてもらう(左から)石川さん、高橋さんら=12日、シルケボー近郊(西山由佳子撮影)

酪農学園大学 雪印乳業の創設者、故・黒沢西蔵氏らが1933年(昭和8年)に開校した「北海道酪農義塾」が起源。黒沢氏は、酪農で国を再建したデンマークの歴史にならない、北海道を酪農によって豊かな大地にする目標を掲げた。その伝統を受け継ぎ、デンマークのオーフス大と学術交流協定を結ぶなど、同国と活発な交流を続けている。大学と大学院のほか、系列に短期大学部、との森三愛高校がある。